

# 「楊家將演義」における比武招親について

——その祖型と傳承の一端をめぐって——

松 浦 智 子

## 一、はじめに

明代に成書された小説の「楊家將演義」には、楊業―楊六郎（延昭）―楊宗保までの三代を扱う『北宋志傳』と、楊繼業―楊六郎―楊宗保―楊文廣―楊懷玉の五代を扱う『楊家府演義』の二系統が存在する<sup>〔1〕</sup>。一般に楊家將の物語といえば、楊業、楊六郎といった男性武將たちの活躍の他に、京劇や地方戲などの演目にもみえる、「破天門陣」の穆桂英や「十二寡婦征西」の寡婦たちによる活躍などが思い浮かぶだろう。こうした女將たちの活躍は『北宋志傳』『楊家府演義』においても遺憾なく描きだされており、例えば『北宋』（以下『北宋』と略す）『楊家府』（以下『楊家府』と略す）の「破天門陣」や、『北宋』の「楊宗保征西夏」、『楊家府』の「楊文廣南伐儂

智高」、<sup>〔2〕</sup>「楊文廣懷玉征西夏」といった征戰物語では、余太君（令婆）、八姐（八娘）、九妹、楊七姐、穆桂英、柴太郡、黃瓊女、重陽女、金頭馬氏、周夫人、杜夫人、宣娘、滿堂春などが颯爽と登場し、佞臣による謀略や敵方の攻撃によりたびたび窮地におちいる楊門の男性武將たちを助けてだしている。つまり、女將たちの存在は、二書における物語の進行上、楊一族存続の關鍵となつてゐるのだ。ところが不思議なことに、こうした活躍は、現存の宋代話本名目、金院本名目、元明雜劇<sup>〔2〕</sup>などにはみえず、そのため従來女將に關連する物語は漠然と、男性武將たちの物語にだいたい遅れて出現したと考えられてきた。<sup>〔3〕</sup>そして、『北宋』『楊家府』に見えるような、男性武將を凌ぐほどの力を持った女性武將の活躍が、いつ頃から、そしてどのような道筋をたどつて生まれてきたのかといった

検討は、これまでほとんど加えられてこなかった。

こうした問題を考えてゆく上で手がかりとして注目されるのが、小説楊家<sup>④</sup>で活躍する女將が、ほとんど「招親（結婚）」を通して一族に組み込まれたか、あるいはその次世代だということである。『北宋』『楊家府』の二書ではしつこいほど繰り返し楊家一門の男性武將と異能を持つ女性武將の結婚が描かれており、楊家は「招親」＝結婚という「血縁関係の構築」を通して女性武將を獲得し、一族の戦力を擴充していつている。つまり、小説楊家將において「招親」はその先に展開されている女將の活躍を導きだす、よりプリミティブな機能を果たしているのだ。そこで本稿では、數ある女將たちの活躍の中でも「招親」話柄に注目して、女將に關連する物語の出自について些かの検討を加えてみたい。

## 二、「招親」による異能の女將獲得」話柄

『北宋』『楊家府』の二書でくり返し描かれる「招親」は、おおよそ圖表一に示したように配置されている。このうち、「黃瓊女反遼投宋」（『北宋』三七回、『楊家府』三〇則（卷王第三則））、と「重陽女軍前諧姻」（『北宋』四二回、『楊家府』三七則（卷六第二則））を除いた残りのエピソードは、腕比べ（比武）

を通して結婚にいたる「比武招親」の形であり、金頭馬氏、穆桂英、寶錦姑、杜月英、鮑飛雲はみな、家族もしくは自身が山賊を家業とするという共通項をもつ。さらに、金頭馬氏の例を除く四例はすべて、女將が男性武將を負かし、男の容貌の美しさに惚れ込んで無理矢理結婚を迫る、という展開になっている。中でも『楊家府』第四六、四八（卷七第四、六則）に見える寶錦姑、杜月英、鮑飛雲の「比武招親」は、その後の西夏征伐にこの三女が全く登場していないことから、別途挿入された部分であると考えられるのだ。このことは、楊家將物語と「比武招親」話柄の結びつきの強さを表していると言えるだろうが、ならば、楊家將物語と「比武招親」話柄の結びつきは、いつ頃からどのようにして生じた現象なのだろうか。

小説楊家將よりも前の作品で唯一「比武招親」の話柄が見えるのは、いわゆる成化本説唱詞話の、『花關索傳』<sup>⑤</sup>である。成化本説唱詞話とは、一九六〇年代に江蘇省嘉定縣の明代墳墓から發見された明・成化年間（一四六五―一八七）刊行の十三種の説唱詞話であり、その中には花關索と鮑三娘の「比武招親」を描く『花關索出身傳』と、花關索と王桃・王悅姉妹の「比武招親」を描く『花關索認父傳』が含まれている。墳墓か

圖表 1

						『北宋志傳』	『楊家府演義』	場所	出身	女將 英雄
						(3) 呼延贊娶 金頭娘		太行山	草寇馬坤 の娘	金頭娘 ・呼延贊
						(35) 穆桂英招 親宗保	(28) 穆桂英招 親宗保	穆閣寨	草寇穆羽 の娘	穆桂英 ・楊宗保
						(37) 黃瓊女反 遼投宋	(30) 黃瓊女反 遼投宋	西夏	西夏國公 主	黃瓊女 ・楊六郎
						(42) 重陽女軍 前諧姻	(37) 重陽女軍 前諧姻	河東	莊令公の 娘	重陽女 ・楊六郎
						(46) 寶錦姑招 親文廣	(46) 寶錦姑招 親文廣	焦山	草寇	寶金姑 ・楊文廣
						(47) 杜月英招 親文廣	(47) 杜月英招 親文廣	焦山	草寇	杜月英 ・楊文廣
						(48) 鮑飛雲招 親文廣	(48) 鮑飛雲招 親文廣	燕家莊	草寇鮑大 登の娘	鮑飛雲 ・楊文廣

( ) 内の數字は回数、及び則數。

ら發見された詞話十三種は北京で刊行されたものであるが、<sup>⑦</sup>  
音韻に蘇州を中心とした吳語の特徴が強くみえることから本

「楊家將演義」における比武招親について(松浦)

來は南方で成立したといわれる。<sup>⑧</sup>そして、『花關索傳』前・後・續・別集は、上圖下文の型式及び挿繪が元・至治年間刊に建安で刊行された全相平話五種とよく似ていること、前集の末葉に「成化戊戌(一四七八)仲春永順書堂重刊」の刊記がついていることなどから、元刊本を覆刻・重刊したものと考えられる。<sup>⑨</sup>

ここで注目されるのは、『花關索傳』の二つの「比武招親」のうち、花關索と鮑三娘の「比武招親」の設定が、『楊家府』の楊文廣と鮑飛雲の「比武招親」の設定によく似ているということである。<sup>⑩</sup>まず、楊文廣と鮑飛雲の「比武招親」の内容を見てみると、——三寶を携えて東岳参りへゆく途中、少年楊文廣は燕家莊を通りかかる。莊主鮑大登が三寶を奪いにくるが文廣に打ち負かされ、次にやってきた三男の鮑世卿も文廣に破れる。これを聞いた鮑大登の娘・鮑飛雲は出馬して文廣と戦うが、形勢が不利と見るや、地の利を生かして文廣を谷底に誘い落として捕らえる。文廣は飛雲に容貌の美しさを見初められて結婚の運びとなる。——というものである。そして花關索・鮑三娘の「比武招親」は、——父を探す旅の途中曹操への貢ぎ物の三寶を奪った關索は、そのうちの南海赤龍鱗甲で鎧を作るため、鮑家莊を訪ねる。莊の入り口に、鮑

三娘と戦つて勝つた者を夫とするという大言碑を見た關索は、まず三娘の父・鮑凱と戦つて破り、次に兄・鮑豊（禮）、鮑義と順に戦いこれを破り、三娘との結婚を約束させる。これを知つた三娘は激怒し、關索と戦うが、兩者力量が互角で決着がつかない。關索は部下・張擒龍の加勢を得て三娘を捕らえ、三娘も美少年の關索を慕つて結婚の運びとなる。——といふものである。

以下に兩者の類似點をまとめてみると、——①女將の名前が【花】鮑三娘、【楊】鮑飛雲である、②家族構成が、【花】父—鮑凱・長兄—鮑豊（禮）・次兄—鮑義で鮑家莊住まう、【楊】父—鮑大登・長兄—鮑太卿・次兄—鮑少卿・三兄—鮑世卿で燕家莊に住まう、③相手の英雄は【花】花關索は小人で曹操から奪つた三寶（二十四面緋紅綉羅旗、豹雷馬、南海赤龍鱗甲）を携え、【楊】楊文廣は少年で東岳參りのための三寶（萬年不滅青絲燈、自報吉凶玉簽筒、夜明素玉）を携える、④比武招親までの経緯が【花】【楊】ともに、まず女將の父と英雄が戦い敗北を喫し、次に女將の兄が英雄と戦つてやはり敗北し、それを知つた女將が自ら出張つて英雄と戦う、という展開である。——勝敗の結果こそ【花】女將の敗北、【楊】女將の勝利、と異なつてはいるが、【花】では關索が鮑三娘を、【楊】

では鮑飛雲が楊文廣をだまし討ちにして辛くも勝利を得ているのは、男女が逆轉した設定の類似といえるだろう。（文中の【花】は『花關索傳』、【楊】は『楊家府演義』の略號）では花關索・鮑三娘の「比武招親」と楊文廣・鮑飛雲の「比武招親」は何故ここまで設定が似ているのか。この問題を解く一つの鍵となりうるのが、金末・南宋末より元初にかけて山東に盤踞した李全の姿を描いた、周密（一二三二—一二九八）『齊東野語』の《李全》條である。この條中には、李全とその妻・楊妙眞の結婚の経緯を記すくだりが見えるのだが、この記述が、花關索傳の「比武招親」話柄と非常に似ているのである。

### 三、李全と楊妙眞

金末、山東を中心とした河北、江北、太行山の一帯で、「紅襖軍」と總稱される大小叛亂軍の活動が活發化し始めるが、李全もこうした時期に山東に生まれた「紅襖軍」の指導者の一人であつた。『宋史』叛臣傳では卷四七六・四七七の紙幅をさいてその生涯を記している。それによれば、李全は嘉定十年（一二二七）に南宋に服屬し、南宋「忠義軍」を統率して金・モンゴルと戦いながら山東地方一帯を支配下におくが、のち南宋寶慶三年（一二三三）にモンゴル軍に破れる。モンゴ

ルに降伏後、李全は「山東淮南行省」を委ねられ山東經營を引き續き行うが、最後は軍勢數十萬を率いて南宋揚州に侵攻し戦没した<sup>(1)(2)(3)</sup>。

そして、『齊東野語』に記される李全と楊妙眞の結婚の顛末は、『宋史』にはほとんど書かれていない李全の若年時代について語る中で描かれている。それによると——牛馬の販賣を業としていた李全は牛客の張介と知り合い、漣水縣へ行く途中盜賊のために行路難澁し、漣水縣の弓卒となるが、「群不逞を結びて義兄弟となし、任侠凶暴、民財を剽掠し」ていた。のち故郷に戻つてもとの業についた李全だが、一日、河中より鐵槍を拾い、「李鐵槍」とよばれてまた山賊家業を始める。その後、山東でかつて衆を聚めて盜賊をしていた楊家堡（居民は武器製造を業とする）の楊安兒とその妹の楊妙眞の集團とぶつかるようになり、李全は「你是是れ好漢、我が妹と一番挑打すべし。もし贏つ時は、我が妹を你に與え、妻となさん。」という楊安兒による結婚の提案で、「臂力人に過ぎ、能く馬上にて雙刀を運い、向かう所披靡たり」という腕っ節のつよい楊妙眞と比武をする。兩者力量は互角で終日勝負無かつたが、李全は伏兵を配することで辛くも勝ちを得て楊妙眞と「親を成」した、とある<sup>(4)</sup>。

「楊家將演義」における比武招親について（松浦）

金文京氏は『花關索傳の研究』においてこの記述を引き、花關索・鮑三娘の結婚譚との類似点として、①相手の女將をだまし討ちにしてからくも勝利を収めている、②楊妙眞と鮑三娘の武器がともに雙刀であること、③楊妙眞の楊家堡も鮑三娘の鮑家莊も武具の製造を業としている、の三点を指摘している。金氏が挙げたこの三つの共通点が、楊文廣と鮑飛雲の「比武招親」とびつたり合致するわけではないが、兄を持つ山賊の女將が英雄と戦つて結婚に至るといふ展開は、楊文廣・鮑飛雲の「比武招親」と一致している。さらに、決着の部分で李全・楊妙眞の場合は英雄が女將を、楊文廣・鮑飛雲の場合は女將が英雄をだまし討ちして辛くも勝利を得ているのは、花關索・鮑三娘と楊文廣・鮑飛雲の「比武招親」の類似点と同じく、男女が逆轉した設定の類似といえよう。

ひるがえつて、李全の相手となつてゐる楊妙眞であるが、李全集團と同じく山東「紅襖軍」の一叛亂勢力であつた楊安兒集團の首領・楊安兒の妹であつた。楊安兒集團は、楊安兒を頂点とした、妹の楊妙眞、從兄弟の楊友、母舅の劉全の血縁グループを中心に、參謀グループや軍職グループなどの要員が脇をかためて構成されており、山東東部の平原地帯を支配下において最盛時には數十萬の勢力を誇つていたといふ。

楊安兒は金朝の派遣した僕散安貞の討伐軍に破れ逃走中に落命するが（二二一五）、楊妙眞はその殘存勢力を率いて再編した女豪傑であつた。<sup>(15)</sup>

李全と楊妙眞の結婚による二集團の結合は『宋史』李全傳やその他の史書にも見えるのだが、李全が配下の部衆を率いて楊妙眞の軍勢に附したのは楊安兒の落命後となつており、楊安兒を仲介とした李全と楊妙眞の「比武招親」についての記述は全く見えない。また、李全が河中より鐵槍を拾うくだりには、關羽や宋江といった通俗小説の英雄と並ぶ劍神説話のモチーフが見えるとの指摘もあるように、『齊東野語』における「比武招親」を始めとした李全の若年期の記述は、多分に物語や説話的要素を含んだものとなつていと言へる。

當時、江南を中心として李全の事跡が物語や説話的要素を持ちつつ流傳していたらしく、元末浙江の士大夫・吳萊が著した『淵穎集』卷四には「檢故度得故洪貴叔所書《李鐵槍本末》寄洪德器」と題する五言古詩がみえ、宋末元初の浙江義烏の人である洪貴叔によつて書かれた『李鐵槍本末』なるものの讀後感が詠まれている。<sup>(16)</sup> また、『齊東野語』《李全》條の末部には、「劉子澄の記した『淮東補史』なる書物は記載が詳細ではあるが、私が當時の諸侯より聞いた話には、劉清之の

書物に載つていない話もあつたので、それらを拾いあげて補つた」という意味の注記が附されている。<sup>(17)</sup> となれば、『齊東野語』を編んだ當時杭州に住まっていた周密は、劉子澄の『淮東補史』を参照しつつ、江南の諸公の間に廣まつていた李全の傳承を拾い集めて李全傳を書き上げたことになる。このことは野語の自序に、「多くの中からいくつかの事件を思いだし、史書や諸書と比較し、近聞の諸説を勘案して『野語』をまとめた」、といった言があることから裏付けられるだろう。<sup>(18)</sup> つまり、洪貴叔の『李鐵槍本末』や周密の李全傳の存在から、モンゴルにより接收された直後の江南ではすでに、遠く離れた山東の英雄の話が物語的要素を持ちながら流傳していたことが伺い知れるのだ。では山東の武將李全の事跡は如何にして江南で喧傳されるようになったのだろうか。

#### 四、益都・淄萊軍團

手がかりとなるのは李全の死後、山東に大軍閥を築いた李全の義兒・李璫の存在である。李全が揚州で戦死した翌年、その殘存集團はいつたん楊妙眞によつて引きつがれモンゴルに認可されているが、楊妙眞はその數年後には後繼者の地位を降りており、ついで義兒の李璫が一二四〇年代のいつ頃か

にその後継者となった<sup>(21)</sup>。李壇はその後、モンゴルから「益都行省」を委ねられ山東の鹽銅の利をもって大軍閥を築いていたが、一二六二年（元の中統三年）、南宋と通じてクビライ・カアンに反旗を翻した。しかし、期待した諸方からの呼應を得られなかった李壇は、濟南城に四ヶ月籠城したのち、生け捕られて處刑された。

當時、李壇軍閥が盤踞していた山東東部から沿岸にかけた淄萊路は、クビライの次弟ジョチ・カサルの投下領であり、モンゴルの西夏攻略の際にカサルの質子となった西夏王子・李惟忠が、最高監督官たる「淄州達魯花赤」もしくは「益都淄萊軍民都達魯花赤」となっていた<sup>(22)</sup>。李壇の叛亂が鎮壓された後は、惟忠の第四子・李恒が功を認められて淄萊路奥魯總管となり、至元七年（一二七〇）には、累遷して益都淄萊路新軍萬戸となっていたが、叛亂鎮壓後に行き場をうしなっていた舊李壇の大軍閥は、モンゴルの戦後處理索により再編されて、一部が益都淄州路新軍萬戸たる李恒の指揮下にはいったと考えられるのだ<sup>(23)</sup>。（また、一部はモンゴル朝廷直隸の「武衛軍」に編入された<sup>(24)</sup>）。

注目されるのは、そのご李恒が、福建宣慰使や江西宣慰使として、舊李壇軍を中核にした軍團をひきいて江西や江陵・

廣東などの南中國各地に駐屯していたということである<sup>(25)</sup>。その孫子の世代も益都淄萊路新軍萬戸の職をうけつぎつつ江南各地に赴任しており、例えば李恒の長子世安は益都淄萊路新軍萬戸の職をつぐ一方で江西行省平章政事にまで至っているし、次子の世顯も兄をついで益都淄萊路新軍萬戸となり、第三子の世顯は同知湖南宣慰使司事となっている<sup>(26)</sup>。つまり、舊李壇の軍勢を中核とした益都淄萊の軍團は西夏の血をひく李氏一族の管理のもと、代々江南と山東の本據地を行き來していたらしいのだ。杉山正明氏が「八不沙大王の令旨碑より」（注23論文）において李惟忠以下山東の西夏系李氏の系譜を分析して指摘するように、「大元ウルス時代を通じて、江南における最重要地たる杭州と廣東の駐留軍は益都・淄萊の軍團であった」ということならば、李全の事跡が江南の各地に広がっていたのも、大きくはこの経路をたどつてのことだったのではないだろうか。つまり李全↓楊妙眞↓李壇↓李恒↓李世安・世雄・世顯と受け継がれた益都・淄萊軍閥が、西夏系李氏の南中國への赴任・進出によって南中國の要所に散らばっていくのに伴い、李全・楊妙眞の傳承も広がっていったと考えられるのだ<sup>(27)</sup>。

軍が移動すれば藝能も移動する。軍隊と藝能の結びつきの

強さがかねてより指摘されるところであり、軍行には講釋師や樂工・藝人が付き従っていた例を多數眼にすることができ(28)。益都・淄萊軍團が舊李瓊の軍勢を中核としていた以上、その中では當然李全や楊妙眞の事跡や生涯が傳承されていただろう。さらに、李瓊の第二夫人は諸王タガチャルの妹であり、亂の鎮定後、クビライが李瓊の嫡子を引き取ったという(30)。モンゴル王家の血筋を引く李瓊の嫡子の存在は、元朝治下の舊李瓊軍勢に李全の事跡を語りつがせていつた原動力となっていたことが想像され、益都・淄萊軍團の中で語り物の一演目として李全と楊妙眞の「比武招親」が行われていた可能性は大きい。ならば、こうした李全と楊妙眞の「比武招親」が花關索・鮑三娘などの「比武招親」話柄に影響を與えていたと考えられるのではないか。

このことを裏付けるかのように、現在まで江西省萬載縣潭埠村(元代の瑞州路・袁州路の境)に傳わる儼戲や、武寧縣(龍興路)の小兒儼、そして安徽省池州貴池縣(江浙行省池州路)に残る儼戲には「花關索と鮑三娘」の演目がみえ、花關索・鮑三娘の「比武招親」が演じられている。既述の通り、江西は李恒やその長子・世安が赴任した地であり、中でも龍興路は、李恒が益都・淄萊軍團を率いて駐屯・駐留したとの記録

が残っている場所である(31)。さらに、宮紀子氏の「花關索と楊文廣」によれば、元末江西の士大夫・劉夏(一三一四—一三七〇)が至正二十七年(一三六七)に獻策した「陳言時事五十條」の第四十九條(32)には、「一、民間の淫詞、艶曲、又、楊文廣、花關索の如き中に姦雄の事を言うは、一に宜しく禁絶すべし」とあり、元の至正年間には、劉夏の遍歴した江西省北部一帯において、説唱詞話『花關索傳』および『楊文廣傳』の話譚が流行していたことが確認される。

事實、『花關索傳』とともに發見された成化本説唱詞話の『仁宗認母傳』と『包龍圖斷曹國舅傳』には、楊文廣が南伐に行つたことを話題にする記述が見えるし、また宮氏が前掲論文において指摘するように、瑞州路の總管馬文質は「楊家將」の物語を愛好して部下を「我が楊郎」と呼んでいた。これらのことは説唱詞話『楊文廣傳』が存在していた可能性を裏付けているといえよう。ならば益都・淄萊軍團の駐屯により江西に傳えられたと考えられる李全・楊妙眞の物語は、花關索の「比武招親」だけでなく、やはり楊文廣の「比武招親」にも影響を與えていたと考えられるだろう。そして、花關索・鮑三娘と楊文廣・鮑飛雲の「比武招親」の設定がかくも似通っていたのは、李全・楊妙眞の物語から影響を受けた両者が、同



じ説唱詞話という母胎で語られていたことから起きた現象だと言えないだろうか。

益都・淄萊軍團から伝えられた李全・楊妙眞の物語は、後代における軍のさらなる移動に伴い廣がって行く。貴州省安順縣に傳わる安順地戯には、楊家將を題材とした『余塘關』『定河東』『三女歸宋』等、「比武招親」話柄を多用した演目が残されているのだが、安順地戯は明洪武年間の雲南遠征の際に江西やそれに隣接する安徽からの屯田兵が入ったことで傳來したものであった。<sup>30)</sup>

このように、「比武招親」は軍隊の移動に伴って廣まり楊家將の物語にも強い影響を與えていったと考えられるのだが、もう一つ、李全・楊妙眞の物語が楊家將の「比武招親」に影響を與えたであろうことを強く想起させるものがある。それは、楊妙眞と楊家將が「楊姓」という共通項をもっていることである。

## 五、楊妙眞の「楊家槍」と楊家將の「楊家槍」

兄・楊安兒の落命後、一萬人規模の殘存勢力をまとめあげていた楊妙眞は、武藝に秀でた異能の女將であった。複数の史料に楊妙眞が騎射などの武藝に優れていたことが示されて

「楊家將演義」における比武招親について（松浦）

いるが、そうした史料の中に彼女が「梨花槍」なる槍術をあまりみだし、これを善くしたとの記述がみえる。例えば『宋史』卷四七七には、「楊氏諡鄭衍德等曰：『二十年梨花槍天下無敵手、今勢已去、撐不行。』」<sup>31)</sup>とあり、梨花槍をもって天下無敵の名を馳せていたという。この楊妙眞の「梨花槍」は後世にも傳わり、明の何良明『陣紀』卷二は「李家短槍、各有其妙。長短能兼用、虛實盡其宜。銳進不可當、速退不能及、而天下稱無敵者、惟楊氏梨花槍法也。」<sup>32)</sup>といつて「楊氏梨花槍」の強さを記し、同じく明の戚繼光『紀效新書卷』卷十《長鎗總說》條は、「夫長鎗之法、始於楊氏、謂之曰梨花、天下咸尚之。其妙在於熟之而已。……（中略）……其用惟楊家之法有虛實、有奇正、有虛虛實實、有奇奇正正。……（中略）……故曰：『二十年梨花鎗、天下無敵手』信其然乎。……」<sup>33)</sup>として、楊氏が創始した長槍の法・梨花槍の奥義をのべている。江南各地に駐屯・駐留した益都・淄萊軍團において李全・楊妙眞の事跡が傳承されたせいも、この他にも梨花槍について記す資料は複数存在し、梨花槍がかなり有名な槍法であったことを伺わせている。ところがこの梨花槍は、『陣紀』や『紀效新書卷』の記述がそうであるように、楊妙眞の梨花槍と明記されず「楊家槍」「楊家之法」として傳承されてゆくうちに、楊家將物語の「楊

「家槍」と混同されていった可能性があるのだ。

『小浮梅閑話』：『演義家所稱楊家將、即楊業子孫。考宋史、業六子、曰延朗、延浦、延訓、延環、延貴、延彬。：（中略）：又『續文獻通考』云：『使槍之家十七、一曰楊家三十六路花槍。』『小知錄』曰：『槍法之傳、始於楊氏、謂之曰梨花槍、天下盛尚之。』

この資料は清・光緒八年（一八八三）の序をもつ孫壁文『新義錄』の卷五七「演義傳奇類」『楊家將』條に記載されるものである。孫壁文は先人の筆記や史料をもちいて楊家將演義の考證を行っているのだが、その末部で『續文獻通考』と『小知錄』の記述を引いて、楊妙眞の創始した梨花槍を、楊業率いる楊家將が創始した槍法として扱っているのだ。壁文はこの條を書く際に、清・嘉慶八年（一八〇四）の陸鳳藻『小知錄』卷八「武備」に載る以下の記述を勘案せずに引用したと考えられる。

「寒骨白」單雄信鎗、伐棗樹爲之。一丈威、隋煬帝鎗、以賜麥鐵杖者。唐哥舒翰敗吐蕃、持半段鎗。宋李全妻楊妙眞善梨花鎗。：（以下略）梨花鎗、鎗法之傳、始於楊氏、謂之曰梨花槍、天下盛尚之。妙在手熟、又貴心靜。習法、八母鎗起手。『續文獻通考』：使槍之家十七、曰楊家三十六路花鎗、馬家鎗、

金家鎗、：（以下略）

というのも、『小知錄』『新義錄』がともに『續文獻通考』のものとして引く記述は、実際には明・萬曆の『江南經略』卷八上「兵器總論」に記載されているもので、孫壁文が『續文獻通考』と記すのは、陸鳳藻の誤りをそのまま引きついだ結果と考えられるからである。不思議なのは、孫壁文も、『小知錄』の「宋李全妻楊妙眞善梨花鎗」の記述を確實に見ているはずなのに、「梨花槍」や「楊家三十六道花槍」をわざわざ楊家將の小説と結びつけていることである。これは、孫壁文の生きた時代には「梨花槍」の槍術を楊家將のものと考えることが定着していたということを示してはいないだろうか。

楊家將と槍術の關係を示すものには、例えば明の脈望館抄本雜劇『八大王開詔救忠臣』『楊六郎調兵破天陣』『焦光贊活拿蕭天佑』などがあり、そこでは楊六郎の巧みな長槍使いが描寫されている。また、明・嘉靖年間の進士である胡宗憲が著した『籌海圖編』卷十一《僧兵》條には、「今之武藝、天下胥推少林。其次爲伏牛要之。伏牛諸僧亦因欲禦盜而學於少林者耳。其次爲五臺、五臺之傳、本之楊氏、世所謂楊家鎗是也。」とあり、僧兵の武藝では、少林寺の武藝、伏牛の武藝、ついで五臺山の「楊家槍」がランキングされる、とある。『新

編醉翁談錄』「小説開闢」の《棍棒》條に『五郎爲僧』の話本名目がみえていることや、『元曲選』に残る『昊天塔孟良盜骨』第四折で、五臺山の長老が楊五郎を指して「貧僧乃五臺山興國寺長老是也。我這寺里有五百眾上堂僧。内有一個和尚姓楊、此人十八般武藝、無有不拈、無有不會、每日在後山打大蟲要子。」と言っていることから、この「五臺の楊家槍」は楊五郎の槍術を指しているといえよう。つまり、楊五郎と五臺山のイメージは元初頃までには繋がっており、その土臺のうえに槍法を含む武藝のイメージが加味されて、小説楊家將成立前にはすでに、「楊家槍」で所謂「楊家將」を想起する形が成立していたと考えられるのだ。ならば、楊妙眞の「楊家槍（梨花槍）」と、楊業率いる楊家將の「楊家槍」は、元末明初ごろには「楊姓」という共通項によつて接近し、混同が起きていた可能性が示唆できるのではないだろうか。事實、實在の人物が同じ「楊姓」であることから楊家將と結びつけられる例は、清の『説岳全傳』に楊家將の子孫として登場する楊再興にも見える。『宋史』卷三六八の記述によれば、楊再興は北宋末から南宋初の盜賊・曹成の將で、紹興二年（一一三二）に岳飛に招安されているが、実際には楊業以下の楊家とは何の關係もない人物であった。

「楊家將演義」における比武招親について（松浦）

## 六、おわりに

益都・淄萊軍團が駐屯先の江南各地で李全と楊妙眞の物語を傳承していたことに加えて、このように「楊姓」が楊家將の物語と結びつきやすかつたのであるならば、楊妙眞と楊家將の物語が藝能の俎上で、接近・融合していった可能性は益々高くなるだろう。さらに、想像を逞しくすれば、楊妙眞の屬していた集團が、楊安兒を頂點とした血縁グループを中核としていたことも、楊業を起點に代々展開される楊家將という一族・家族型の物語に接近しやすかつた要素の一つだつたと言えるかもしれない。いずれにせよこれらの諸點を考え合わせると、小説楊家將における「比武招親」話柄は元初頃から江南を中心に廣がりをもせていた李全・楊妙眞の物語に大きく影響されながら、その形の一端を形成していったと推測されるのではないだろうか。

### 注

- (1) 『北宋志傳』はその前編とも言うべき『南宋志傳』と合刻されており、『南北兩宋志傳』とも題す。『楊家府演義』は正名を『楊家府世代忠勇通俗演義』と題す。

(2) 現在傳存する楊家將關係の資料には、羅輝『醉翁談錄』「小說開闢」に記される『楊令公』、『五郎爲僧』の話本名目、陶宗儀『南村輟耕錄』に記される『打王樞密』の金院本名目、『元曲選』に収録された元朱凱『放火孟良盜骨殖』、無名氏『謝金吾詐拆清風府』、脈望館明抄本の雜劇に無名氏『八大王開詔救忠臣』、『焦光贊活拿蕭天佑』、無名氏『楊六郎調兵破天陣』、などがあり、楊家將物語の語り繼がれてきた軌跡を垣間見せてくれる。

(3) 例えば上田望『講史小説と歴史書(3)』(『金澤大學中國文學教室紀要』三、一九九九年三月) P. 五一―五五

(4) 以下「小説楊家將」で『北宋志傳』『楊家府演義』の二書を指すこととする。

(5) 『楊家府演義』の則數は、卷數毎に區切らず、卷頭から通算したものを便宜上用いて表示した。

(6) 成化本説唱詞話『花關索傳』については、井上泰山・大木康・金文京・氷上正・古屋昭弘共著『花關索傳の研究』(汲古書院、一九八九)を参考にした。

(7) 同じく成化本説唱詞話の一つである「薛仁貴跨海征遼故事」の封面には、「北京新刊」と題されており、末葉に「成化辛卯永順堂刊」とあることから、永順堂は北京の書肆であったことがわかる。

(8) 古屋昭弘『説唱詞話『花關索傳』と明代の方言』(7) 前掲書所收附論

(9) (6) 前掲書所收、金文京「解説篇」、及び宮紀子「花關索と

楊文廣』(『汲古』46)

(10) 花關索・鮑三娘と楊文廣・鮑飛雲の比武招親の類似については、(3) 前掲上田氏論文 P. 五五に一部言及がある。

(11) 李全については、『宋史』《李全》條の他に、池内功「李全論一南宋・金・モンゴル交戦期における一民衆叛亂指導者の軌跡一」(『社會文化史學』14、一九七七)、森田憲司「李璫の亂以前―石刻史料を材料にして―」(『元代知識人と地域社會』汲古書院、二〇〇四。初出『東洋史研究』47―3、一九八八)を主に参考にした。

(12) 『齊東野語』卷九《李全》「…(略)…有妹曰小姐姐、或云其女後稱曰姑姑。年可二十、膂力過人、能馬上運雙刀、所向披靡。全軍所過、諸堡皆載牛酒以迎、獨楊堡不以爲意。全知其事、故攻劫却之。安兒亦出民兵對壘、謂全曰「你是好漢、可與我妹挑打一番。若贏時、我妹與你爲妻。」全遂與酣戰終日無勝負、全忿且慙。適其處有叢篠、全令二壯士執鈎刀、夜伏篠中。翌日再戰、全佯北、楊逐之、伏者出、以刀鈎止、大呼、全回馬挾之以去。安兒乃領衆脩牛酒、迎歸成姻、遂還青州、自是名聞南北。…」また本條の訓讀は(6)の前掲書 P. 六四―六五に掲載される金文京氏の訓讀を参考にした。

(13) 『金史』卷一〇二《僕散安貞傳》、『宋史紀事本末』卷二三『李全之亂』

(14) 『宋史』卷四七六

(15) 大塚秀高「劍神の物語(下)―關羽を中心として―」(『埼玉大學紀要』教養學部30號) P. 七三

- (16) 『宋詩紀事』八一に「洪貴叔。貴叔義烏人。月泉吟社第三十五名、自署避世翁。」とあり、モンゴルの南宋接收後に吳溪に退居してた吳渭によって立てられた月泉吟社に参加していたことから、洪貴叔が宋末元初に浙江周邊にいたことがわかる。
- (17) 「劉子澄嘗著淮東補史、紀載甚詳。然餘所聞於當時諸侯、或創書所未有者、因摭其概於此、以補劉氏之闕文云」
- (18) 周密は景炎二年（至元一四年（一二七七））にモンゴル軍の兵火を逃れて湖州弁陽から杭州の癸辛街に移り、繼いで至元一九年（一二八二）に西湖西岸に移つて終生この地に住み着いていた。そして『齊東野語』載表元の序には至元二八（一二九一）の記載がみえ、周密六十歳のころに本書が上梓されたことがわかる。
- (19) 「海遭多故、遺編鉅帙、悉皆散亡。老病日至、忽忽漫不省憶爲大恨。閒居追念一二於十百、懼復墜逸爲先人羞。迺參之史傳諸書、博以近聞脞說、務事之實、不計言之野也。」
- (20) 「故膠州知董公神道之碑」（『益都金石記』卷四、『山左金石記』卷二二、『光緒益都縣志』卷二八所收）
- (21) (11) 前掲森田論文P.二四三―二四九
- (22) 愛宕松男「李璫の叛亂とその政治的意義―蒙古朝治下における漢地の封建制とその州縣制への展開二」（『愛宕松男東洋史學論集第四卷元朝史』三一書房、一九八八、初出『東洋史研究』六一四、一九四一）
- (23) 『元史』卷一二九《李恒傳》。また、李惟忠の「涇州都達魯花赤」は柳貫『柳待制文集』卷九《李武愷公新廟碑銘》に、「益都淄萊軍民都達魯花赤」は吳澄『吳文正集』卷八五《李武愷公家傳後序》に残される記録である。なお、以下の論考は、杉山正明「八不沙大王の令旨碑より」（『モンゴル帝國と大元ウルス』京都大學學術出版會、二〇〇四。初出『東洋史研究』五二―五三、一九三三）および、「西夏人儒者高智耀の實像」（同前、初出『清朝治下の民族問題と國際關係』科學研究費補助金研究成果報告書、一九九一）の研究成果から大きな示唆を受けた。
- (24) 『元史』《李恒傳》「李璫反連海、恒從其父葉家入告變、璫怒、繫恒闔門獄中、璫誅、得出。世祖嘉其功、授淄萊路魯總管、佩金符、併償其所失家資。至元七年、改宣武將軍益都淄萊新軍萬戶、從伐宋。」
- (25) 『元史』卷九九《兵志二・宿衛》「三年十月、諭益都大小管軍官及軍人等、先李璫懷逆、蒙蔽朝廷恩命、驅駕爾等以爲己惠。：（中略）：今命董文炳仍爲山東東路經略使、收集爾等、直隸朝廷、充武衛軍近侍勾當。比及應職、且當守把南邊、隄防外隙、庶內境軍民各得安業。：、森田（11）前掲論文P.二五〇―二五八
- (26) 『元史』《李恒傳》「元帥府罷、授昭勇大將軍、同知江西宣慰司事、加鎮國上將軍、遷福建宣慰使、改江西宣慰使。」
- (27) 『元史』《李恒傳》「子散木忒（世安、江西行省平章政事；龔加眞（世雄）、益都淄萊萬戶；遜都臺（世顯）、同知湖南宣慰使司事。孫薛徹干、兵部侍郎；薛都充、益都般陽萬戶。」
- (28) なお、李全・楊妙眞の傳承は、舊李璫軍の軍人が編入されて
- 「楊家將演義」における比武招親について（松浦）

いた朝廷直隸の「武衛軍」(のち「親衛新軍」)の移動からも同時並行的に廣がっていったと思われる。

- (29) 金文京「『戲』考―中國における藝能と軍隊」(『未明』8、一九九一―三)

- (30) タガチャルの妹と李璣の婚姻關係については、周良霄氏が「李璣之亂與元初政治」(『元史及北方民族史研究叢刊』4、一九八一)で祝允明『前聞記』(『紀錄彙編』所收)の記述をもつて紹介するほか、杉山正明氏が「クビライ政権と東方三王家」(『モンゴル帝國と大元ウルス』第二章「モンゴル帝國の變容」京都大學學術出版會、二〇〇四。初出『東方學報』(京都)54、一九八二)において「郝文忠公集」卷三七『再與宋國兩淮制置使書』「且青齊塔察國王之分土、而李公王之妹婿也。伯姬雖歿、叔姬復來。」の記述を以て紹介している。

- (31) 虞集『道園類稿』卷二四『宗濂書院記』「國朝大兵下江南、文忠公時以退相老於江東、兵至赴水死。宋亡、精舍燬豫章之内附也。李武愍公恒以滎萊之軍守之既定。遂引兵與諸大將合取崖山而還鎮豫章。生息其傷殘、恩意備。至其子世安能世之。」豫章は江西龍興路に屬す。姚樞『牧菴集』卷一二「別將孔遵窮追、併破趙孟潛軍、復其州、而還龍興。」

- (32) (9) 前掲宮論文

- (33) 『劉尚賓文續集』(『續集四庫全書』所收、成化刊本)卷四「一、民間淫詞、艷曲、又、如楊文廣、花關索中言姦雄之事、一宜禁絶」

- (34) 『仁宗認母傳』：「官里(仁宗)道：『卿(包公)、寡人差楊

文廣收下九溪十八洞、管得山河鐵也似牢』、『包龍圖斷曹國舅傳』：「記得南蠻人馬動、狄青楊廣上邊廷。收蠻九年六個月、今日山河得太平。自從得勝回朝日、邊廷留下馬和人。狄青楊廣回朝轉、未曾賞賜衆軍人。」

- (35) 『劉尚賓文續集』卷三「馬侯本部士衆祭楊郎文」

- (36) 帥學劍校注『安順地戲劇本選』(民俗曲藝叢書、二〇〇四)

- (37) 田仲一成『中國巫系演劇研究』(東京大學出版會、一九九三)第二編第一章「貴州省安順府詹家屯の地戲」

- (38) この他に明『宋史紀事本末』卷二三や、清『資治通鑑後編』にも同様の記載が見える。

- (39) 『續文獻通考』卷一三四、『皇朝文獻通考』卷一九四、『皇朝通典』卷七八、『皇朝禮器圖式』卷一五、『八旗通志』卷四〇、『雙橋隨筆』卷二、『淵鑑類函』卷二二四、『佩文韻譜』卷二二之九、『明詩綜』卷五四など。